

---

# はなひらかねど

清久 志信

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

はなひらかねど

### 【Nコード】

N2736Z

### 【作者名】

清久 志信

### 【あらすじ】

恋愛無関心な咲子は、双子の妹・妙子の所為で大嫌いな合コンに出る破目になる。

そこで出逢った晴希は偶然にも同じ大学・同じ学部の所属だった。これまでの経験から恋愛食傷気味になっているという晴希とは、何となくウマが合い友達付き合いが始まったのだが。。  
恋愛嫌悪な二人が織りなす、ちよっと変わった友情恋愛物語。

## 序章 はな 糸ひもせず

ああ、面倒臭い。

目の前に広がる光景に、咲子はうんざりしきっていた。さすがにそれを表に出すことはしないが、ただただ、この愛想笑いと媚のセール会場　いわゆる合コンという状況から離れたい思いでいっぱいだった。

本来、咲子は合コンなど好きではない。それどころか、むしろ嫌いだ。

けれど、その咲子がこの場所に来なくてはならなくなったのは、ひとえに双子の妹である妙子の所為だった。

数日前、どうしてもあと一人足りないのだと、高校時代の友人が妙子に電話を掛けてきた。だが妙子には、どうしても外せない用事があつたらしい。いつもならば、嬉々として参加するのだろうが、残念そうな声を上げていたのを覚えている。

しかし、そのすぐ後にとんでもないことをその友人に言っていたのだった。

「ごめんねえ。行きたいけど無理そうだから、代わりにサキを行かせるわ」

何を勝手なことを、と反論する前に、妙子はさっさと話を終わらせ、電話を切っていた。

「アンタ、何やってくれてんの？」

「どうせ暇でしょ？　家にいたって本読んでるかレポート書いてるくらいじゃなあい」

「合コンなんかより、そっちの方がよっぽど有意義だわ」

あまりにもこちらの都合を考えない妙子の行動に、怒りを通り越

して呆れてしまう。そもそも、怒っても無駄に体力を消耗するだけだと咲子は知っていた。妙子は昔から他人を振りまわすことが得意なのだ。しかも、本人には悪意がないから余計に性質が悪い。

咲子にとって妙子という存在は、身内でなければあまり関わり合いになりたくないタイプの人間だった。

「でもさあ、キョウちゃん本っ当に困つてたのよあ？ 友達が困つてたら、助けるのが友情つてもんじゃなあい？」

こんな台詞も端から聞いていると、ただ都合良く言い訳しているように聞こえるのだが、妙子の場合は本当にそう思つて言っている。目の前の困っている人を助けたいという、実に純粹な親切心なのだが、その際に犠牲になるのは妙子自身ではなく、周りにいる近しい人間であり、特に咲子はその対象になることが多かった。

妙子がもう少し思慮深く、自分自身の慈悲深い行動によって周りにもたらず影響などが考えられたならば、そうはならなかつただろう。しかし、幸か不幸か 咲子にとっては確実に不幸なのだが

妙子には目の前の問題を処理することで精一杯、という能力しか備えていなかった。

そして更に不運なのは、そういった迷惑を被る状況になつたとしても、咲子にはそれを切り抜けられるには十分な判断力や思考力、実行力などがあつたことだろう。

今までにも妙子の安請け合いで、本来やるはずではなかつた仕事を手伝わされたり、足りない人員の補充要員にされたりもしたのだが、咲子はもともと何事も器用にこなす為にさほど困難な事態に陥つたことがない。反対に安請け合ひした張本人である妙子は、不器用で鈍臭いので、手伝う分だけ邪魔になつたりもする。

結果、妙子は大した仕事もせず、簡単に誰にでもできる仕事を回され、咲子の方には難解で手間のかかる作業が回ってくるのだつた。しかし、そういった仕事をやらされる破目になるならまだいい。

事務的な仕事はけして嫌いではないし、終わった後に達成感もあり、時にはそれなりの見返りさえある。

だが、合コンなど異性に興味のない咲子には何の得もない。『ゴウコン』じゃなくて、『ゴウモン』よ、と心の中で毒づいた。

「そんな嫌そうな顔しなくなっただっていいじゃない。サキ、彼氏いないんだし、問題ないでしょ？」

「彼氏がないとか関係ないの。合コン自体が嫌いなんだから」

「それは知ってるけどお。ほらほら、キョウちゃん達と久しぶりに遊ぶって考えたらいいのよお。男の子たちはそのオプション程度って考えて、ね？」

小首を傾げて屈託なく笑う妙子。その仕草はいかにも可愛らしく、男受けもいいのだろう。同じ顔をしていても、自分には到底できない表情だと思しながら、咲子は大きな溜め息をついた。

「あ、明日の晩ご飯はサキの好物ばっかにするからあ！ 何がいい？ 生姜焼き？ 唐揚げ？ お豆腐のハンバーグ？ 最近寒いし、豚汁も作るうかあ？」

咲子の機嫌を取ろうと、妙子は途切れる間もなくまくしたてる。

そんな必死な姿を見ると、やはり咲子は妙子を憎めなかった。これも身内の情なのか、それとも慣れからくるものなのか。

「それなら、ブリ大根と蓮根のきんぴらも作ってよ」と結局許してしまうのだった。

そんな数日前の甘い自分を怒鳴りつけてやりたい。

そう思いながら、目の前に並んでいた揚げ物を一つ口に運ぶ。ギトギトの油と濃過ぎる味付けの所為で、すぐに箸を置いてしまった。口直しに含んだカクテルは水っぽく、不味さが口中に拡がっただけで、気分は下降線をたどる一方だ。

それにひきかえ、合コンは現在、比較的和やかに進行していて、お互いの学校や仕事の話で盛り上がっていた。

咲子は時々相槌を打つ程度に反応はしていたが、途中からそれも疲れて辞めてしまっていた。どうやら周りもさほど咲子を気にして

いないようだ。特に男性陣は、自己紹介や質問をし合った段階で咲子にあまり興味が持てなかったらしい。高校時代のクラスメイトたちも、咲子の性格は熟知しているし、むしろ大人しくしてくれている方が自分の気になる相手と親密になりやすいと思っっているのだろう。無理やり咲子を話に加えるような真似はしなかった。

そのまま合コンは、咲子を空気のようにした状態で終えるのだろうと思っていた時、目の前に移動してきた男がいた。

「岡本さんって、無口なんだな」

「え？」

まさか話しかけられると思っていなかった咲子は、咄嗟に何も返せなかった。

改めて声の主に視線を向けると、自己紹介で渡辺晴希と名乗った男だと思し出す。

「えっと、渡辺君、だったかしら？」

「あ、覚えてくれてたんだ」

「顔と名前を覚えることは得意だから」

勘違いされては困ると思ひ、遠回しに特別な意味はないことを伝える。大抵の場合、咲子のこういった態度で相手の男は気分を害するのだが、晴希は変わらず笑顔で話を続けてきた。

「そっかー、それ羨ましいな。俺結構苦手でさ。接客業やってるのに駄目だよな」

「そうね。致命的じゃない？」

「はつきり言うなー。ま、自分でも自覚してるから、返す言葉もないけどさ」

明らかに冷たいと思われるような咲子の態度だったが、晴希はそれでも気にする素振りもなく話しかけてくる。

これ以上に冷たい態度をとり続けてしまつては、周りの雰囲気も悪くなると思ひ、咲子は少々晴希の話し相手になつてやることにした。

「さっき聞いたんだけど、渡辺さん、A大なんだろう？ 何学部？」

「経営学部だけだ」

「マジで？ 俺も経営なんだけど」

「渡辺君もA大なの？」

偶然にも同輩がいたらしい。しかし同じ学部とはいえ、一学部の人数は何百人という。晴希の存在を知らずにいたのも、無理はなかった。

「すつげえ偶然だなー。でも、全然岡本さんのこと知らなかったわ」

「そうね。でも、『お』と『わ』だったら学籍番号も離れてるし、そんなもんじゃない？ 基礎演や第二外語は、絶対に同じクラスにはならないじゃない」

「そりゃそうだ」

何が面白いのかわからないが、晴希は咲子の淡々とした説明にも楽しそうに頷いていた。

咲子は、こういう人見知りなく、誰にでも親しげに話しかけるタイプは苦手だ。まるで、自分の双子の妹が男になったのではないかというような、錯覚を感じてしまうからだ。

ますます早く終われと念じる想いが強くなるが、飲み放題の終了時間まであと三十分はある。

時計の針の進む速度が速まるはずもなく、咲子はただ、面白味を感じられない晴希の世間話を淡々と聞き流し、適当な相槌を打つだけの人形のようにならざるを得なかった。

「じゃあ、そろそろ二次会のカラオケに突入しようか？」

男性側の幹事の声掛けに、咲子はようやく解放されると安堵の息をついた。

最初から、二次会には参加しない約束だったのだ。それに、自分が参加しない方が盛り上がるだろうことは易々と想像できた。

幹事が清算を済ませている間に、他のメンバーは店の外へと歩き出す。最後尾に連なりながら、咲子はこの後の予定を少し考えた。

両親は飲食店を経営しているので、定休日以外は帰りが遅く、普段から咲子と妙子は交代で夕食を作っている。

今日は丁度妙子の当番であったが、彼女も出掛けているはずだ。当然家に真っ直ぐ帰ったとしても誰もいないし、食事の準備などもされていない。

居酒屋の料理があまりにも不味すぎて、ほとんど口にしていない咲子は空腹感をどうにか鎮めたかった。そういえばと、この辺りに自分好みの定食屋があったことを思い出し、そこに寄ってから帰ることに決定する。

幹事の二人が店から出てくるのを見計らって、先に帰ることを告げた。

女性陣はもともと咲子が二次会不参加ということを知っていたので、気をつけてねと声を掛ける。

逆に男性陣は、表面上は残念そうな声を上げて、咲子の暇を惜しむ様子を見せていた。

それに咲子も「ごめんなさい。また誘って下さいね」と我ながら嘘くさい愛想を返し、手を振ってその場を後にする。

しばらく歩いて人混みに紛れた頃、咲子は特大の溜め息をついた。「あー、疲れた！ まったく、この疲労分は夕エに返してもらわないとね」

家に帰ったら妙子に嫌味を言っつてやると心に決め、目的とする定食屋へと足取りも軽やかに向かおうとする。

しかし、数歩歩いたところで、誰かに呼ばれたような気がして、反射的に足を止めた。

何となく嫌な予感を感じながら、ゆっくりと振り返る。

妙子から数メートル後方、笑顔を湛えて駆け寄ってくる渡辺晴希の姿が見えた。

## 第一章 はな しらぬひと

すっげえ、つまんなそう。

初対面の相手に対して失礼な感想だとは思ったけれど、それが晴希の率直に感じた印象だった。

岡本咲子と自己紹介をした彼女は、明らかに他の女性メンバーと異なる雰囲気を持っていた。一言でいえば、クール。細かく説明をすれば、無口で媚びなくてマイペースで、それでも最低限周りの雰囲気を壊さない程度に気を遣っている。

多分、この合コンに関しては、彼女の本意で参加しているのではないのだろう。晴希はそう読んでいた。

だからこそ、興味が湧いたのだ。どんな人なのだろうと。

しかし、それは彼女を『女』として 言い換えれば、恋愛対象として ではなく、『一個人』として気になったという意味だ。

何より晴希が一番気になったのは、コンパが始まって最初の方にあった質問に対しての答えだった。

それぞれ一人ずつから質問を出し、それを順に答えていくという形式で、一人の女の子が発した質問が『初恋はいつ、どんな相手？』というものだった。ありきたりと言えればありきたりな質問だ。

それに対して咲子の答えは、一瞬誰もが驚くようなものだった。

「初恋はしてないわ」

短く素っ気ない答えに、質問を出した女の子は「まさかあ」とか「何かちよつとくらいはあるでしょ」などと新たな答えを引き出すうとしていたが、咲子は曖昧に微笑むと「本当にないわよ。多分、この先もね」と付け加えただけだった。

白けてしまいそうな空気になったが、そのまま咲子が「じゃあ、私が質問する番ね」と上手く話を切り替えたので、その後も場の雰囲気は保たれた。それでも、その咲子の一言はメンバー全員に、更

に言つと、男性陣全員にかなり強いインパクトを与えた。良い意味でも、悪い意味でも。

その後も、予想通りともいうべきか、咲子の存在は少し異質だった。

積極的に話に加わらない。しかし、適度に相槌は打ったりして、話は聞いている様子。

まるで空気のように存在して、彼女は彼女だけのペースで動き続けている。それでも妙に浮いてしまわないのは、絶妙なバランス感覚を備えているからなのだろうと思えた。

しばらく離れて様子を窺っていた晴希だったが、他のメンバーの恋愛話や自慢話にも飽き、それ以上に咲子と話がしてみたいと思つて、彼女の前へと移動した。

話しかけられた咲子は驚き、多少冷たいとも思えるような言葉もあつたが、あからさまに嫌がる態度はとらず、晴希の会話に付き合つてくれた。

多分、こうして話しかけられるのも嫌いなんだろうとは思つてはいたものの、それでも晴希は咲子と色んな話をしてみたかったのだ。とはいえ、最初からあまり細かいことを訊いたりしても失礼だと思ひ、とりあえずは世間話程度の話題で間を繋ぐ。

まだ二次会もあることだし。そう思っていたのだが、居酒屋を出た彼女が「用があるから先に帰る」と言い出したことは予想外だった。

少し考えれば、無理やり付き合わされた咲子が一次会だけで帰つてしまうことも十分に考えられたのに、悠長に構えていた自分自身の浅はかさが恨めしい。

二次会の会場に向かおうとしている幹事を慌てて呼び止め、晴希は手短かに帰ることを伝えた。幹事を務める友人は顔を顰めて答える。「晴希、岡本さんは美人かもしれないけど、辞めといた方がいいと思うぞ？ なーんかお高くとまってるって感じじゃん。絶対男を見下してるタイプだって」

「そんなんじゃないって。女の子一人で帰したら危ないだろ？ それにもともと、俺は人数合わせなんだしさ。岡本さん帰ったなら、俺がいなくなっただ方が数合うだろ」

「いや、まあ、そうだけどさ」

「んじゃ、またな。楽しんでこいよ」

軽く肩を叩くと、晴希はくると身を翻し、咲子の消えた方角へと駆け出した。まだ居酒屋の前で別れてからそれほど時間は経っていない。

さほど走らなくても、すぐに咲子の後ろ姿を見つけることができた。

「岡本さん！」

あと数メートルというところで、声を掛ける。咲子の足が止まり、ゆっくりと振り返った。思わず笑みが零れると、咲子は少し訝しうに「どうしたの？」と訊ねてきた。

「いや、女の子一人帰らせたら危ないと思ってさ」

「別に大丈夫よ。そんなに遠くもないし、まだ遅い時間でもないし。素っ気なくはあるが、冷たくは感じない程度の口調で、咲子は晴希の申し出を断ろうとしているようだった。しかし、実際は自分を鬱陶しく思っているのだらうということくらい、晴希は承知していた。

「てかさ、実はそれはただコンパを抜け出す口実で、ホントは岡本さんと話したかっただけ」

晴希が正直に告げた途端、咲子の表情が目に見えて強張った。そのまま無言で踵を返し、歩き始める。

「あ、ちよっと！ 誤解しないでほしいんだけど！ 俺、別に岡本さんを口説こうとかそういうんじゃないから！」

慌てて晴希は後を追いつ、咲子の隣に並ぶ。

「じゃあ、何？ 私は彼氏とか恋愛に興味ないわよ」

「うん。むしろ、岡本さんのそういう部分に興味があんの」

刺々しくなる咲子の態度に負けず、晴希は居酒屋では話せなかつ

たことを語り始める。

「俺も今、彼女とかいらなんて思ってるし、今日の合コンも数合わせだったわけ。で、今までにも『彼氏いらな』とか言ってる女の子には何人かあったことあるけど、岡本さんはその子たちとも何か違うなーって思ってる、ちょっと話をしたくなっただんだ」

そこまで話した瞬間、咲子の足がピタリと止まる。

自分の熱意が通じたのかと思っていると、咲子は晴希を見上げて少し迷惑そうに言った。

「どうでもいいけど、どこまでついてくるつもり？」

「とりあえず、家までかな。送っていく間だけでも話し相手になってくれたらいいんだけど」

さすがに面と向かって目障りだと言われるかもしれない。そう思っただけで覚悟を決めた晴希に、咲子は呆れたような溜め息をついた。

「私、すぐその定食屋に寄るつもりなんだけど、渡辺君どうする？」

「え？」

「だから、さっき居酒屋で結構食べたんですよ。定食屋はきついんじゃないかって訊いてるの」

その言葉が、遠回しに話に付き合ってくれろという意味だと気が付き、晴希は思わず声高に叫んでしまった。

「あ、問題ないない！俺の胃袋のキャパは、居酒屋程度では埋まらないから！」

「そ、そう……」

晴希のあまりの勢いに押され気味な咲子だったが、すぐに気を取り直すと、「こっちょよ」と晴希を促した。

案内された先は、家庭的な雰囲気漂う店。なかなかの人気店らしく、店内はサラリーマンから家族連れ、大学生まで様々な客層で賑わっている。

案内されたテーブルに向かい合って腰を下ろすと、咲子はすぐさまメニューを広げて晴希にも見せてくれた。

「ここ、何頼んでもハズレないわよ。さっきの居酒屋と違ってね」  
微かにのせられた嫌味が、合コンに対する咲子の不満の一部を覗かせた。

咲子の言うとおり、あの居酒屋で出された料理は、お世辞にも美味しいとは言えなかった。

「確かにあれは微妙だったな。ま、安いから仕方ないと言えば仕方ないんだけど」

「安くても美味しいお店はあるわよ。あそこは完全に店の雰囲気ですら誤魔化してるだけ。お酒も全然美味しくないし」

「岡本さん、厳しいねー」

色気より食い気、などと言っては失礼になるだろうが、咲子の発言はまさにその言葉が相応しい気がした。見た目のクールの印象とは、また違った側面に、晴希はつい顔を綻ばせてしまう。

「親が飲食店やってるからね。渡辺君、決まった？」

「うん。俺のどストライクなのがあったし」

晴希の返事に頷くと、咲子は恥ずかしがるそぶりもなく、少し声を張って店員を呼んだ。

「すぐさま「お伺いいたします」と笑顔を湛えた女性店員が注文を受けにくる。

「『和風デミハンバーグ定食』を一つと……」

「あ」

咲子の注文に思わず声を洩らしてしまった。まさに晴希が頼もうと思っていた品だったからだ。が、今更決め直す間もなく、咲子に悪い気がしながらも、「同じのをご飯大盛りで」と付け加えた。

店員が注文を確認し戻っていった後、咲子が少し不思議そうに訊ね掛けてくる。

「何でそんなに申し訳なさそうに注文するわけ？」

「え？ ああ、何となく、被ると嫌なんじゃないかなと思って」

「……まあ、確かに親しい人とだったら被らないようにするけど」

「うわー、はつきりと親しくない人宣言された」

「親しくはないでしょ。今日会ったばかりなんだし」

咲子の言葉は冷たく切り捨てるようにも取れるが、見事なまでに正論でいっそ清々しかった。

本当に、晴希の今までの人生の中で、周りにはいなかったタイプだ。咲子に対する晴希の興味が、また一つ高まる。

「岡本さんさ、何で恋愛に興味ないの？」

「渡辺君だって、彼女要らないでしょ？ 似たような理由じゃない？」

触れられたくはないのか、それとも単純に話すのが面倒なだけか、咲子はちゃんとした回答を寄越してはくれなかった。

しかし、それではわざわざ追いかけてきた意味がないと思い、晴希は食い下がる。

「いや、俺とは違うでしょ。俺の場合は、一応色んな子と付き合ってきた結果、恋愛食傷気味になっただけで、もともと恋愛に興味がないわけじゃないし。岡本さんの場合は、完全に人生の上で恋愛不要と思ってるんじゃないの？」

「不要、ってわけじゃないけど、ね……」

億劫そうではあるが、咲子は話し始めた。

「恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの。私、双子の妹がいるんだけど、その妹が私と正反対の超恋愛体質でね。あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ」

心底疲れると言いたげに、咲子は肩を竦める。そしてその疲れを癒そうとするかのように、水を一口含み、喉を潤した。

「でも、別にそんなに珍しくもないでしょ。私みたいに、『彼氏は要らない』『恋愛に興味はない』って言ってる子、結構いるわよ」  
「確かにいることはいる。でも、その場合は、俺と同じように『痛い目を見た』だとか、『うんざりしてる』ってタイプか、そういうことを言っただけ逆男の気を引こうとする口だけタイプか、どっちかなんだよな」

全ての女性がとは言わないまでも、今までに自分が関わった異性

を思い返すと、ほとんどがこのパターンに当てはまっていた。

しかも後者は意外に多く、常日頃から「男なんて興味ない」などと言っていた女子が、いわゆる『イケメン』から告白された途端にあっさりと付き合った、などという光景を晴希は何度も見ていた。

「それにさ、初恋してないってのが珍しい。『男要らない』タイプの女の子でも、大抵は初恋くらいしてるから」

「渡辺君の言い方だと、私は超異端児みたいね」

多少失礼にも思える晴希の発言だったが、咲子はそれに不快さを滲ませることもなく、むしろ面白がるように声をたてて笑った。

少しは警戒を解いてくれたようだと思うと、晴希の口からは自然と安堵の息が笑みとともに零れ落ちた。

「確かに異端児かも。勝手なこと言うけど、岡本さんだったら、まともな異性の友達になれそうな気がするんだ」

「異性の友達、ね」

小さな呟きを洩らすと、咲子はわずかに苦々しそうな表情を見せる。

何か嫌なことを思い出させてしまったのかもしれない。せつかく友好的な雰囲気になり始めた途端の躓きに、晴希は心の中で自分に對して舌打ちをした。

「本当に、男女間での友情って成立するのかしら」

「岡本さんは、有り得ないと思ってるタイプ？」

「昔は信じてた。でも、途中から信じられなくなった、ってところかな」

だから、男友達もいないのよ、と咲子は苦笑を重ねる。

咲子の発言から考えると、過去に友人と想っていた異性と何かあったのだろうか。

「まあ、難しいと言えば難しいのかもしれないけどさ」

「ちよつと、今言ってたことと違うじゃない」

「一般論としてってことだよ」

咲子から軽い批難を受け、晴希はすかさず弁解に入った。

「中学とか高校の頃って丁度お互い成長期だからさ、それまで異性として意識してなくても急に気になったりもするもんだしさ」

小学校からの同級生が、気付いたら体型も変わり、おしゃれなどにも気に掛け始め、一気に大人びてくる。

かつては平気で手を繋いだりできた相手に、軽く触れることすら躊躇われてしまう。

それは思春期特有の感覚だろう。

そして、異性を意識し始めると同時に、自分の恋愛対象としての枠に入るのか入らないのかを、どこかで測っているように思える。

咲子はさばさばとしているけれど、女らしさもちゃんと持ち合わせているし、気遣いもできる性格だ。客観的に見れば、外見的にも内面的にも、そういった思春期の男子の多くから恋愛対象として見られてしまうのも仕方がないだろう。

「岡本さんの場合、充分美人の部類に入ると思うんだよね。あ、これは俺の好み云々は抜きね。だから、友達として見ようと思っても、無理な部分はあると思うんだよ」

「でも、渡辺君はさっき、友達になれそうっていったじゃない」

「だって、今の俺は可愛らしい思春期の男の子じゃないし」

そう言ってニツと口角を上げると、咲子は一瞬面食らったような表情になり、数瞬後小さく吹き出して押し殺した笑いを零した。

そこに注文した定食のお盆を二つ持った店員がやってくる。

笑いを堪えながら咲子ありがとうと料理を受け取ると、一口水を飲んだ。それでようやく落ち着いたので、とりあえず食べようと晴希を促した。

「美味そー！ めっちゃ腹減ってきた！」

ふんわりとした淡い湯気を立てたハンバーグには、濃厚な褐色のソースがかけられ、肉の焼ける匂いとソースの焦げる匂いが混じり合って食欲をそそる。

副食には野菜の炊き合わせとサラダが添えられていて、味噌汁も具沢山。

六百円という値段から考えると、満足過ぎるポリユームだ。お金にあまり余裕のない晴希には、有り難過ぎる料金設定だった。

頂きますと手を合わせると、さっそく箸をとり、メインのハンバーグを一口頬張る。

見た目よりもあっさりとした風味のソースに、ジューシーな肉の旨みが絡み合っつて口中に拡がった。

「ウマっ！ 岡本さん、この店ナイスチョイス！」

「お気に召してもらえて良かったわ」

晴希が勢いよく食事をかきこむ姿に、咲子は多少呆れたような表情ではあったが、それでも嬉しそうな感情も見取れた。

そして咲子自身も料理を口に運ぶ度に、本当に美味しそうに表情が綻んでいる。

居酒屋にいた時とはまったく違う咲子の雰囲気、晴希は興味深く観察していた。

「……それで、今は『可愛らしい思春期の男の子』じゃない渡辺君は、何で私と友達になろうと思ったの？」

晴希の観察するような目に気付かないのか、それとも気にしていないのか、咲子は食事を堪能しながらも先程の会話に戻してきた。

口に入れたばかりの炊き合わせのかぼちゃを急いで咀嚼し、お茶で流し込んでから晴希は口を開く。

「『女』ってさ、正直面倒なんだよな」

「女を目の前にしていう台詞？」

「岡本さんは女だけど異端児だから例外。じゃなくて、俺が今まで関わってきた女のこと」

話しながら思い返してみると、思わず表情を顰めてしまう。

が、そんな顔をしていては、美味しい料理とそれを紹介してくれる咲子に失礼だと思い、すぐに改め、笑顔を作った。

「俺さ、スポーツサークル入ってるの」

「スポーツって何の？」

「色々。フットサルしたり、3on3したり、テニスしたり。特定

のスポーツばかりするんじゃない、やりたいことは何でもするから『スポーツ』サークルなわけ」

「なるほどね」

今まで話した咲子の印象から考えると、サークル活動などにはあまり興味がなさそうだった。そう思い、更に詳しく説明を続ける。

「まあ、運動は好きだけど、大きな大会目指して鍛錬するってのは大学に入ってまでしたくない、ってヤツが多いとこなんだ。俺もそうだしね。でもって同時に、運動できると女の子にちやほやしてもらえらるって考えてるヤツも多いわけ」

「要するに、スポーツがメインのイベントサークルって感じ？」

「そう、まさにその通り！」

皆まで説明しなくても、咲子がピタリと言いたいことを汲み取ってくれたので、晴希は思わず声を高くしてしまった。

一瞬近くの席のサラリーマンがびっくりしたような視線を向けたので、恥ずかしくなってすぐさま声音を落とし、誤魔化すように箸を動かす。

「そ、それでさ、うちのサークルに入ってくる女の子も八割方男目当てなんだよ」

「まあ、イベントサークル紛いなら、それは仕方ないでしょうね。でも、それは男の子も嬉しいんじゃないの？」

「女目当てのヤツはね。俺はスポーツを楽しみたい派だし、やっぱり女の子いると気を遣うからさ。あんまり激しいスポーツには参加させられないし、かといって、いつも応援ばかりさせてるのもないって。俺以外にもそう思ってる奴は何人かいるよ」

晴希の所属するサークル内では、はっきりとスポーツ派と出逢い派に分かれている。スポーツ派としては、あまり男女間の親交を深める為のイベントなどはしたくはないのだが、圧倒的多数を誇る出逢い派は、そういったイベントに意欲的だ。不満を感じて、スポーツ派ばかりで新たなサークルを作る話も出たのだが、人数が集まらずに断念した過去があった。

それでも、他の同系統のサークルよりは、スポーツもちやんとやっているということで、スポーツ派のメンバーたちは妥協をしたのだ。

「でもさ、女側からしたら、女目当てのヤツもスポーツしたいヤツも、みんな一緒に見えるわけ」

「そうなの？」

「そうなの。あからさまに、『彼女欲しいからココに入ったんでしょ？』とかいう女もいたし」

「つまり、それを言った女は『彼氏欲しいからココに入りました』ってことよね。何で他人も自分と同じ考えと思うのかしらね」

咲子の溜め息まじりの返事に、その通り！ と再び声を上げそうになったところを、際どいところで飲み込んだ。

自分を落ち着かせようと、またお茶を一口すする。

「ホントにそう。で、押し付けがましく『付き合っただけでもいいわよ』的な雰囲気漂わせてたりするんだよね」

「別にそんな子なら付き合わなくてもいいじゃない」

咲子に言われるまでもなく、実際晴希はそこまで我の強い相手とは付き合いはしなかった。けれど、付き合った後で、そういう本性を見せ始めた場合もあったのだ。

それを言つと、あっさり咲子は「それは渡辺君の見る目がなかったのね」と言い放つ。

「いや、まあ、そう言われたらおしまいなんだけどさー」

「もしかして渡辺君、そういうタイプの女の子とばかり付き合ってたわけ？ だったら真面目そうな子と付き合えば、恋愛も嫌じゃなくなるんじゃないの？」

「俺もそう思ってたさ、すごく素朴で控え目で、健気に尽くしてくれる子と付き合ってたわけよ」

咲子と同じことを思い、付き合った彼女のことを思い出す。

晴希にとって、それは一番最近まで付き合っていた彼女だった。

特別顔立ちが整っているわけではないが愛嬌があり、いつもにこ

にこと笑顔を浮かべ、甲斐甲斐しく晴希の為に尽くしてくれた。  
良い子だったのだと今でも思う。

けれど、だからこそと言ってもいいのかもしれない。

晴希の恋愛嫌悪に決定打を与えたのは、その良い彼女だった。

「良い子過ぎた」

「は？ 何それ？」

良い子なら問題ないじゃないと、咲子は納得できない様子だ。

「だからさ、すっごく尽くしてくるんだけど、それが重くなって……」

「ああ、そういうこと」

「ホント甲斐甲斐しく尽くしてくれてさ。風邪ひいた時なんか、特に助かったんだけど……。そのうち、それがしんどくなってきたんだよな」

贅沢を言っていると自分でも思うのだが、それでも彼女の献身を重荷に感じてしまった瞬間、関係が続けられないと悟ってしまった。それはただの我がままだと批難されるかと思っただが、意外にも咲子は少しばかり表情を曇らせながらも、困ったように微笑んでいた。「どうかした？」

「何かね、妹の話を聞いてるみたいだなと思って」

「妹さんって、さっき言ってた恋愛体質の？」

「そう。あの子も、本気で好きになったら、尽くして尽くして尽くしまくるタイプなの」

つまり、晴希の話の彼女が自分の妹と被ってしまい、複雑な心境に陥ったのだという。

妹の献身的な姿を知っている咲子にとって、晴希の発言は腹立たしく思っても仕方ないだろう。それなのに晴希を咎めようとはしない咲子が疑問だった。

「辞めればいいのって思うくらいに一途だね。ほんっと、馬鹿正直。それで騙されたことだってあるのに、あの子全然懲りないんだもの」

「……ごめん。不愉快な話だったよな？」

「そんなことないわよ。尽くされ過ぎると嫌になるって言うか、重すぎると思うのも当然じゃない？ 結婚するとかならまだしも、学生同士の恋愛なんて、そこまで発展する可能性だって低いんだから冷めている、というよりも、極めて冷静というべき口調の咲子に、少し前の会話を思い出した。」

『恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの』

『あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ』

恋愛は疲れるものと考えている咲子には、それに一生懸命になり過ぎている人間 特に双子の妹などは、理解しがたいのだろう。

同時に、そういう強い想いを向けられた場合、咲子自身も一歩引いてしまう性質のようだった。

「岡本さんって、やっぱりいいわ」

「何よ、突然」

前触れもなく呟いた晴希の一言に、咲子の表情が俄かに険しくなる。

我に返り、自分の発言が誤解を招きかねないものと気付いて、慌てて訂正した。

「変な意味じゃないって！ 今までさ、こつという話を女にしたら、みんな揃って彼女の味方だったからさ。てか、男でも俺の味方してくれるヤツ少なかったし」

「別に渡辺君の味方をしてるわけでもないんだけどね。単に、渡辺君とその彼女の価値観や恋愛観が合わなかっただけでしょ」

晴希の弁解を聞いた咲子は、元通りの冷静で淡々とした調子に戻り、止まりがちだった食事を再開する。

それにホッと胸を撫で下ろし、晴希も話しっぱなしで進んでいなかった食事に箸をつけた。

「そうなんだけど、周りから言わせると俺はひどいヤツになるみたいだな。ま、俺もやっちゃいけないことをやってたって自覚はあるけ

ど」

「何したわけ？」

「作ってくれたご飯に、『もっとこうした方がいいよ』ってアドバイスしちゃった」

晴希の口から乾いた笑いが零れる。

咲子は「あー、それは可哀想ねー」と半分くらいしか気持ちの籠もっていない言葉を返した。

「いや、でもさ。俺、料理得意だからさ、正直なところ俺が作った方が美味かったわけ」

「でもそれは女の子の立場ないわね」

「だから、初めて作ってくれた時に思わず出ただけで、それ以降は言わなかったって」

晴希は自分の非を認め、その後何度か出そうになった助言を、ことごとく飲み込んできた。彼女は何かを作る度に晴希の様子を気にしていたので、ずっと気に病んでいたのだろうと思うと、余計に不憫でならなかった。

「もしかして、それが別れた原因の一つになってたりもするの？」

「う……。まあ、ないこともない」

『美味しい』以外の感想を述べようとしたら、ついつい余計なことまで言ってしまうようになる。その所為で、晴希は彼女の作った料理を食べていても、言葉少なになることが多かった。

けっして彼女の料理が不味いわけではないのだが、だからこそ、あと一歩足りない部分を教えたくなる。けれど、それを言うと、彼女のプライドが傷ついてしまう。周りの友達からは、『料理上手』の褒め声高い彼女だったので、なおさらその思いは強かった。

「そっか、それで私は夕工を許せるのね」

「夕工？」

「あ、さっきから話に出てる妹よ。妙子って言うの。夕工はね、不器用だし頭も悪いし考えも浅いし、良いところなんてほとんどないんだけど、昔から料理だけは上手いのよ。まあ、今は学校通ってる

から、当然と言えば当然なだけだね」

それまで妹を語る際には微妙な表情を浮かべてばかりの咲子だったが、今は珍しく嬉しそうに、そしてどこか誇らしげに微笑んでいた。

咲子にとって、妹の唯一自慢できる部分なのだろう。

「ほら、よく『旦那の胃袋』を掴めって言っじゃない。あれと似たようなもんよ。タエはホントろくなことしないんだけど、いくら腹が立ってても、美味しいご飯作るからって謝られたら、つつい許しちゃうのよね」

「胃袋掴まれてるの」と冗談めかして笑う咲子につられて、晴希も自然と頬が緩んでいた。

「じゃあ、俺も頑張って岡本さんの胃袋掴もうかなー。料理上手っでの、友達としてポイント高くない？」

「本当に上手だったとしたら高評価ね。でも私、味には結構うるさいわよ」

「それは既にわかってるよ。でも、俺も結構研究してる方だからね」晴希自身、単なる料理好きではないと自負している。

美味しいと言われるお店にはお金の許す範囲で食べに行くし、料理の基礎なども独学だが学んでいた。

常日頃から自分でレシピを考えては、親しい男友達に試食してもらったりもしていたし、きっと咲子に美味しいと言わせられるだけのものができるだろうという自信があった。

「じゃあ、ご相伴に与れる機会を楽しみにしてるわ」

そう言っって笑うと、咲子は残っていた料理を綺麗に片付け、箸を置いてごちそうさまと手を合わせた。

その様子からは、上辺だけの社交辞令でないように思える。

「それってさ、これからも友達として付き合ってくれって取っいいんだよね？」

「いいわよ。今のところ害はなさそうだし、同じ学部の友達いると色々助かることもあるしね」

そこまで言うてから、咲子は「但し」と付け加える。

瞬間的に真面目な表情になったので、晴希も思わず表情を引き締め、咲子の言葉を待った。

「渡辺君の料理が下手だったら、即縁は切れるかもね」

「え、そこ!？」

晴希のツツコミに対し、咲子はにんまりと悪戯な笑みを浮かべたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2736z/>

---

はなひらかねど

2011年12月10日01時51分発行